

広島大学大学院医歯薬保健学研究科
教授 川崎 裕美

「子育ては思うように行かない。しかし、そこが面白い。」3月末に終了したNHK朝の連続ドラマ「べっぴんさん」に何度も出てきたセリフです。

平成28年度下半期の朝の連続ドラマ「べっぴんさん」は、子ども服ブランドの創業者の人生をもとに作成されたドラマでした。ドラマの舞台は、戦前から1970～80年代前半までのようでした。ドラマの後半では、日本の高度成長期にあつて企業は利益を追求し規模拡大していきます。しかし、主人公は利益追求だけでなく、総合的に子育てを支援するという経営理念を大切に、さらに次世代につないでいくという展開でした。この時代に、すでに「子育て」に関するこのような言い回しや、社会貢献の発想があつたのか。と思いました。

ゆめもくばの取り組みは、まるでこのドラマの続きをリアルに行っているかのようです。1990年代から、すでに20年にもなります。引越しは、創設の吟古館から数えて、西条シヨージ、西条プラザと3回目です。広島大学の助教授（現在は准教授と呼びます）時代から、東広島市民として、仕事として、公私ともにお世話になりました。ここにも、朝ドラになりそうな様々な出来事がありました。創設に参加したスタッフの思いは、自分の子育てもしながら社会と繋がっていたい、他の人の役に立ちたいなど、様々でした。しかし、自分たちが子育てを楽しくする互助の仕組みづくりをする、という共通の「心意気」の中でゆめもくばが発展してきたことは間違いありません。現在のゆめもくばで行われている事業はアイデアにあふれ、その時々の子育ての渦中にある家族に合わせて変化しています。「渦中にある」人と柔軟にそれを調整できる「渦中を過ぎた」人が「渦中にある人」が必要な事業を考えるからだと思います。変化の激しい今の時代、柔軟な発想とそれを実現できる柔軟な体制はゆめもくばの強みであり、貴重な資源です。

「子育ては思うように行かない。しかし、そこが面白い。」このセリフを語るときが子育てを振り返るときでなく、子育ての渦中にあるときであるよう、これからもゆめもくばの強みを活かし、時代に合わせた活動を行ってほしいと思います。ドラマの中で、企業が経営理念を次世代につないだように、ゆめもくばの「心意気」を次の世代につないでいきましょう。